

オオキンケイギク



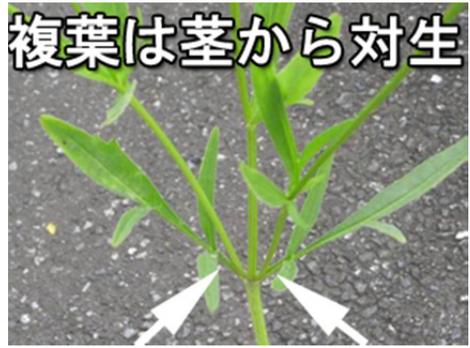
■オオキンケイギクの特徴

オオキンケイギクは、北アメリカ原産のキク科の多年生の草花です。温帯に分布し、高さは30cm～70cm、開花期は5～7月です。頭状花の直径は5～7cmですが、頭状花は8枚位の舌状花と数十枚の管状花が集まって1つの花に見えています。それぞれがおしべやめしべを持った花の集まりなのです。

葉の形が特徴的で、冬の間はロゼット型(丸く広がり地面にへばりつく)、4月ごろはくつべら型、5月ごろは楕円形の小葉が5枚位ついた複葉が茎から対生に生えます。



この複葉は、ムーミンのニョロニョロみたいなイメージです。まんまるの蕾から花が咲いた後は、玉ねぎのような実を結んで、羽根つきの無数の種を風に飛ばしながら、子孫を増やします。この複葉の小葉は、茎から対生して生えています。



下の写真は、5~6月の開花・結実です。



花の構造は、キク科特有の舌状花・管状花による頭頂花です。



■ オオキンケイギクと紛らわしい花

オオキンケイギクと紛らわしい植物を3つ挙げておきます。

まず「ハルシャギク」。これは花の中央が紫褐色に染まっているので区別してください。葉も細いです。

次に「キバナコスモス」ですが、葉の形がヨモギのようでニヨロニヨロ型のオオキンケイギクとは全然違います。

そして「ホソバハルシャギク」。花はまったく同じ顔で葉が細いだけ・・・と言われて

います。



■ どのような問題があるのですか

黄色いカワイイ花をつけるため、鎖国の開けた明治時代から観賞用に輸入されるようになりました。そして価格も安く、荒地でも強く繁殖できるために戦後には道路や堤防など法面の復旧地に積極的に植えられるようになりました。

しかし強い性質が種として増えすぎる原因となり、気が付けば外国から連れてきたオオキンケイギクが日本古来の草花の生えるところを奪ってしまいました。同じ環境を複数の生物が争いあうことを「競合」といいますが、たいていは共存できず、どちらかが勝ち、どちらかが「絶滅」に向かいます。これが本当に自然界のルールのもとに起こったことなら仕方がないのですが、この場合は人間が自分の都合で連れてきたことが問題です。放っておくと自然界の生態系バランスが崩れて最終的には人間自身が困ってしまいます。

環境省はこの外来種問題を改善するために外来生物法で 2006 年にオオキンケイギクを特定外来生物に指定して輸入・栽培・移動・譲渡などを禁止しました。でもまだ駆除はされていないので街中でたくさん見かけます。



■オオキンケイギクの取り扱いについて

オオキンケイギクは特定外来生物なので、移動するなど下手に扱うと外来生物法に触れ、罰せられます。個人レベルで駆除したい場合は、環境省の考えでは、根ごと抜いてその場に3日間放置し枯死させたあと、燃えるゴミとして袋に詰めて捨てるのが無難とのこと。ただし、7月になると結実し種子を飛ばすので触ってはならないそうです。個人的に駆除したい場合は枯死させて捨てることと、土地所有者や管理者の同意が必要であることも注意してください。

参考・引用文献

特定外来生物同定マニュアル. 環境省

文責：野中賢輔

(外来スイレンの解説は、次のページです。)

外来スイレン



外来スイレンとは、ヨーロッパを原産とするセイヨウスイレンなどを品種改良して作られた、耐寒性を持った多年草の園芸品種です。

■見分け方

- 赤、桃、黄、白色の、手のひらくらいの大きさの花が咲く。
- 葉には切れ込みがあり、大きさは車のハンドルくらい。



■外来種としての問題点

外来スイレンは、在来の水草など、水生生物の生育に影響を与えます。例えば名古屋市版レッドリスト 2010 で準絶滅危惧に指定されているガガブタなど、希少な在来の生きものの生育が脅かされるおそれがあります。

参考文献

瀧崎吉伸・芹沢俊介. 2012. スイレン属. STOP!移入種守ろう! あいちの生態系～愛知県移入種対策ハンドブック～. 愛知県.

文責：小菅崇之